

〈報告〉

体育系大学生の飲酒意識調査： 完全禁酒学習寮入寮半年後の飲酒行動の変容

河合 祥雄*・太田 涼*・根岸 隆介**・乙丸 知子***・植村 愛***

Attitudes of college students towards alcohol consumption:
changes after five months of group living in a dormitory while abstaining from alcohol.

Sachio KAWAI*, Ryou OHTA*, Ryusuke NEGISHI**,
Tomoko OTOMARU***, and Ai UEMURA***

1. はじめに

本キャンパスではスポーツ健康科学部に健康学科を有するにも関わらず、学生を対象とした飲酒状況調査やアルコール意識調査は多くはない⁹⁾。2009年の調査¹⁰⁾¹¹⁾は、本学学生の飲酒に関する、未成年飲酒、飲酒強要・被強要、強制飲酒を許容する風土、飲酒を悪癖ととらえる学生の存在などを明らかにした。しかし、その回収率は低く、その調査結果の信頼性を損なう。

完全な禁酒を謳った啓心寮入寮の全1年生を対象とした悉皆調査を、入寮時と入寮約半年後とに行うことは、教育で飲酒に関する意識・行動がどのように変化したかの実態を明らかにできよう。

2. 目的

「飲酒に関する大学生の意識調査」(眞崎睦子：北大生101人と飲酒)のアンケート調査用紙⁴⁾を運動

* 順天堂大学スポーツ健康科学部
Research Laboratory of Sports Medicine, School of Health and Sports Science Juntendo University

** 順天堂大学啓心寮係員
Keishin Student Dormitory of Juntendo University

*** 順天堂大学さくらキャンパス健康管理室
Healthcare Office of Juntendo University (Sakura Campus)

競技者に使用できるように平成21年度に改変した調査用紙¹⁰⁾¹¹⁾を基に、本キャンパスに在籍するスポーツ健康科学部生ならびに医学部生(328名+127名)の1年生を対象に飲酒意識調査を行い、2009年の調査で明らかにされた諸問題¹⁰⁾¹¹⁾の再確認および改善点を見出すことを目的とした。

3. 対象とアンケート配布・回収方法

啓心寮に居住している順天堂大学スポーツ健康科学部全1年生ならびに医学部全1年生を対象として、2013年5月15日にアンケートを配布、啓心寮または健康管理室にてアンケートを回収した。また、2013年10月1日にも同様のアンケートを配布し、啓心寮にてアンケートを回収した。

4. 方法

意識調査は無記名アンケートとして、「飲酒に関する大学生の意識調査」⁴⁾を改変したものをを用い、飲酒経験、飲酒強要・被強要、飲酒教育、アルコール体質、運動頻度などを調査した。追加した項目は、現在の競技に対する取り組み方(真剣度: Visual analog scaleで0から10までに数値化したもの)、週あたりの練習日(日)、一日あたりの練習時間(時間)、運動(練習や実技授業)や試合の前日

にアルコールを控えたかどうかの項目であり、削除した項目は断酒会に関する項目(Q17-Q22)である。

アンケートの冒頭に、(1)調査結果を、授業の中での教材もしくは今後の学生指導の資料として学内外で利用すること、(2)無記名アンケートであり、個人のプライバシーの侵害等、記入したことによる不利益は一切ないこと、(3)意識調査中に肉体的・精神的苦痛を訴える場合、調査用紙の記載を途中で中断しても何らかの精神的・身体的不利益を被るものではないこと、を明記した上で調査を行った。

本調査は、「体育系大学生の飲酒意識調査および主観的アルコール濃度判断に関する検討」として、研究倫理等審査を経ている(順大ス倫大21-3号)。

配布枚数は2013年5月15日、同年10月1日ともに啓心寮在寮の一年生(スポーツ健康科学部ならびに医学部)の総数である455枚であった。アンケートの最終回収は2013年11月5日で、その時点までに回収できた875枚(全体の回収率96.2%)について検討を加えた。

アンケートの回収数はスポーツ健康科学部1年生5月318枚(97%)、10月314枚(96%)、医学部1年生5月124枚(97%)、10月119枚(93%)であった。

5. 結 果

5-1 対象者背景

入寮直後では年齢記載のある450例中、未成年が95%を占め、20歳以上は5%であった(18歳258人、19歳170人、20歳15人、21歳6人、22歳1人)。10月アンケート時点では未成年が89%、20歳以上は51人(12%)であった。男子303名、女子140名(男子68%:女子32%)であった(別稿表(以下単に表)1-1, 表1-2)。

5-2 飲酒状況

飲酒経験者は入寮直後の回答者442名中250名(1年生180人、医学部70人)であり、未成年者428名中235名(55%)に飲酒経験を認めた。さらに、入寮約半年の10月の調査では、未成年者400名中301名

(75%)と5月の時点より増加していた(表2-1, 表2-2)。

5-2-1 定期的飲酒

入寮直後の調査では、飲酒経験のある250名中63名(25%)の学生が定期的に飲酒をしていた。特に医学部1年生(42人60%)はスポーツ健康科学部1年生(21人12%)に比べて5倍も多い。また、入寮半年後の調査では飲酒経験のある333名中184名(55%)の学生が定期的に飲酒しており、入寮直後(63人)に比し、3倍増していた(表3-1, 表3-2)。

飲酒頻度は、週1回102人、月1回47人、週2・3回(3, 4日に1回程度)14人であった。毎日飲酒していると記載した学生は13人、うち4名は未成年であった(図1)。

定期的に飲酒する理由(複数回答可)として、入寮直後では「友人らとの会話を楽しむ材料として欠かせない」との回答が102件(49%)、次いで「嫌なことを忘れるため」32件(16%)、「習慣になっていて特に理由はない」26件(13%)、「アルコールが好きだから」14件(7%)、「アルコールがないと眠れない」4件(2%)、「その他」28件(14%)であった。これは入寮半年後ともほとんど割合として変化はなかった。

5-3 飲酒の強要・被強要

飲酒を強要された経験があると回答した学生は入寮直後で442名中177名(40%)、入寮半年後では433名中202名(47%)と増加していた(表4-1, 表4-2)。

入寮半年後では強要されたと回答した学生のうち、58%は強要されるがまま飲酒し、断ったのは11%にとどまった(表5)。入寮直後でもほぼ同様の回答が得られた。

強要してきた人物は、入寮半年後の調査では、68%が大学の友人であり、次いで大学の先輩が57%であった。その他の項目としては、「高校時代の友人」、「地元の友人・先輩」、「アルバイト先の友人・上司」にくわえて「大学の指導教員」2名などがあつた。入寮直後でもほぼ同様の回答が得られた(表

6).

一方、強要したことがある学生は、443名中21名(5%)のみであった(入寮半年後調査)。

5-4 アルコールと運動

本学の学生の競技に対する姿勢：真剣度はスポーツ健康科学部1年生と医学部1年生間には大きな差は見られなかった(表7)。

運動の前日も試合の前日も飲酒を控えるとの回答は、入寮半年後に全体の433名中281名(65%)で、入寮直後でもほぼ同様の結果が得られた。

他方、試合の前も運動の前も飲酒を控えないと記載した学生はスポーツ健康科学部1年生が4%であったが、医学部1年生は16%であった。飲酒により、悪い結果を及ぼした学生の割合は良い結果を及ぼした者より5倍以上(2%：11%)も高いことも示された(表8)。

6. 考 察

6-1 対象者背景

本調査は悉皆調査を目標としたが、入寮直後の回収率は97%、入寮半年後の回収率は95%、全体で96%となった。未成年飲酒やアルコールハラスメント¹⁾が社会問題化している昨今、将来はある程度の強制力を有する全学的な調査が必要であるかもしれない。

今回の調査は男女比が約7:3で、未成年者は入寮直後で95%、入寮半年後では89%であった。平成21年度調査¹¹⁾¹²⁾における1年生の年齢、性別の割合とほぼ同じであった。

6-2 飲酒状況

日本のアルコール消費量は年々増加の一途をたどっており、最近では女性、未成年者、高齢者の飲酒問題が表面化している。飲酒経験を持つ高校生は8割を超え、高校生にとっての飲酒はありふれた行動の一つと言える⁷⁾。今回の調査では飲酒経験を持つ学生は1年生が対象という事もあり入寮直後で57

%、入寮半年後で76%であった。しかし、入寮半年後には75%の未成年者が飲酒していることが明らかとなった。

定期的に飲酒をしている学生は入寮直後では25%であったのに対し、入寮半年後では55%と大きく増加していた。これは北海道大学の学生の45%⁶⁾と比較すると多いうえ、5月から10月の半年の間に飲酒の機会が増え、習慣化したものと考えられる。

今回の調査期間が、夏休みを含んだため、大学の外で、友人などとの交際で飲酒習慣を身につけた可能性を否定できない。この点は次回の調査に考慮する必要がある。

毎日飲酒している学生が13名(うち未成年者4名)いたことも、将来におけるアルコール中毒者の形成に関わる重要な事実であろう。

定期的な飲酒の理由として「友人との会話の材料として欠かせない」が約半数を占めたことは、一人で飲酒をしている者は少ないことを示している。大学生を対象とした飲酒の効果と期待を規定する調査において、友人と一緒に飲酒をする時の意図は「いい気分・社会促進期待」「ストレス解消期待」「体調悪化・気分悪化期待」「攻撃性増大期待」の4つに大きく規定され³⁾、その中でも「いい気分・社会促進期待」の割合が一番大きいとされる³⁾。今回の調査結果と関連づけて考えると、約半数の学生が「飲酒自体を楽しむ」というよりも一緒に飲酒をする人との「社交」のために飲酒をしていると考えられる。

しかし、「友人との会話の材料として欠かせない」の次に続く理由が「嫌なことを忘れる」32件(16%)、「習慣になっていて特に理由はない」26件(13%)、「アルコールが好きだから」14件(7%)、「アルコールがないと眠れない」4件(2%)であったことは、将来のアルコール中毒者の予備軍を形成しうる飲酒理由として、改善すべき問題と考える。特に、アルコールは嫌な記憶を逆に強化することが明らかにされている⁶⁾ので、この誤った常識の是正が急務となるであろう。

今回の調査では39%の学生が二日酔いにより学校を遅刻あるいは欠席を経験している事実が明らかに

なった。これは中日本自動車短期大学の7.2%⁵⁾と比べれば圧倒的に多く、本学として問題視しなければいけない事実であろう。

また、暴言を吐く学生(37名:11%)、暴力をふるう学生(22名:7%)の存在も明らかにされ、マナーを超えた、ハラスメントの対象として対処する必要があるだろう。

6-3 飲酒の強要

我が国のアルコール消費量の増大と並行して、アルコール依存症や飲酒に関連した交通事故や犯罪、急性アルコール中毒、アルコールハラスメントなどの問題も起きている¹⁾。今回の調査では、飲酒を強要されたことがある学生は47%(入寮半年後)であったのに対し、飲酒を強要したことのある学生は5%にとどまり、42%もの差が見られた。この割合の差の背景としては、今回の調査が1年生を対象としたものであり、ほとんどの場合、上級生や年長者と同席しての飲酒が多いためであると考えられる。学生のほとんどが部に所属しており、強要してきた人物の半数が、大学の先輩や年上であり、上下関係がある「体育会系」飲酒行動が規定されている可能性を前回¹⁰⁾と同じく指摘できよう。ただし、強要してきた人物に「大学の指導教員」2名が認められたことは特筆されるべき記載と考える。教員における飲酒強要根絶を徹底すべきであろう。

飲酒の強要に起因する大学生の「事故」としては、1999年、熊本大学医学部1年生が新歓コンパ恒例のバトルという「飲み比べ」の後、死亡したケース⁵⁾、2002年、神戸大学の教官(当時)が実験の失敗を理由に飲酒を強要し、2名が急性アルコール中毒で入院したケース⁵⁾、2012年5月小樽商科大学アメリカンフットボール部の飲み会で未成年7名を含む9名が搬送され、19歳の1年生部員が死亡した事件は記憶に新しい²⁾。同部では「1年生がバーベキューで焼けた肉を4年生に持って行き、その際に紙コップでお酒を注がれる慣習」「飲酒等で具合が悪くなった者はグラント脇にある小屋または合宿研修所で休む指導⁹⁾」があったとされる。また、平成24年度の

東京消防庁調べによる急性アルコール中毒の救急搬送数は11,976人中、20歳未満510人、20歳代5,443人である¹²⁾。

本学学生には「付き合い程度で十分」、「良いイメージはないし、今後も積極的に飲みたいとは思わない」という意見があるように、飲酒の強要に対し否定的である学生が多数いることが示された。

6-4 アルコールへの意識

酩酊状態の人と同席した経験がある学生は入寮直後で50%、入寮半年後で53%とほとんど変化はなかった。スポーツ健康科学部1年生と医学部1年生には19%の差があり医学部学生の方が経験値は高かったが、これは医学部の主キャンパスが本郷・御茶の水にあること、経済的に豊かな上級生・部OB・OGが多いことから、二次会付きの飲酒の機会が多いためだと想定しうる。

6-6 アルコールと運動

低用量のアルコールは抗不安作用を持っており理論的にはパフォーマンス強化をもたらすこともありうる。しかし、これまでの研究は一貫してアルコール影響下にある被験者で精神的運動技能の幾つかの面で有意な障害がみられることを示している¹³⁾。

今回の調査では、試合前日および運動の前日に飲酒を控える学生は65%存在し(入寮半年後調査)、アルコールは運動にマイナスの作用を持つと考えている学生が多い。しかし、試合前日・運動前日共に飲酒を控えない学生はスポーツ健康科学部1年生が4%であるのに対し、医学部1年生は16%と4倍も多い。これは所属部活動の競技レベルが、全体としてはスポーツ健康科学部所属の運動部活動レベルに比較して低いためであるとも考えられる。しかし、医学部生が持つ自身の健康観に欠落がある可能性は否定できない。

7. 結 論

飲酒経験者は医学部1年生がスポーツ健康科学部1年生に比べて5倍も多かった。また、入寮半年後

では飲酒経験のある333名中184名(55%)の学生が定期的に飲酒しており,入寮直後(63人)より大きく増加していた。禁酒の教養である啓心寮に居住する学生において,入学後の約半年間での飲酒率の増加が明らかにされた。

本学部ならびに医学部を含め,さくらキャンパスをあげての飲酒教育を行うことが「健康総合大学」としての本学の在り方である。

謝 辞

本調査を許可賜りました学生部部長(濱野光之先生),啓心寮総寮監(四方田清先生),学生相談室室長(廣澤正孝先生)に深謝いたします。

引用文献

- 1) 青木大地(2010)大学生の飲酒行動・意識・知識に関する研究—アルコールハラスメントに着目して—,茨城大学教育学部 保健体育撰修・スポーツコース・健康コース 卒業研究発表会会議録
- 2) 北海道新聞(2012)2012年6月28日朝刊掲
(<http://www.hokkaido-np.co.jp/news/donai/383376.html>)
- 3) 金地美知彦(2007)飲酒を規定する心理的要因の検討—飲酒効果の期待,飲酒に対する態度と主観的規範—八戸大学紀要, 34, 163-178.
- 4) 眞崎睦子(2007)北大生101人と飲酒「飲酒に関する大学生の意識調査」,北海道大学大学院教育学研究員紀要, 103, 113-126.
- 5) 水野敏明,大塚三雄,橋本真弓(1998)大学生の飲酒とストレスに関する調査研究 中日本自動車短期大学について,中日本自動車短期大学叢, 28, 103-112.
- 6) Nomura H, Matsui N (2008) Ethanol enhances reactivated fear memories, *Neuropsychopharmacology*, 33, 2912-2291.
- 7) 野津有司,渡邊正樹,渡部 基,下村義夫,市村國夫,荒川長巳,久保元芳,佐藤 幸,上原千恵,柴田宣之,国吉恵一,藤山博英(2006)日本の高校生における危険行動の実態および危険行動間の関連—日本青少年危険行動調査2001の結果—。学校保健研究 48: 430-447.
- 8) 小樽商科大学 学園便り:特集アメフト部飲酒事故168(特別号):1-8,2012.
<http://www.otaru-uc.ac.jp/campus/seikatujoho/gakuendayori/dayori168.pdf>
- 9) Otsu K (1984) Alcohol drinking patterns among university student. アルコール研究と薬物依存, 19(3), 211-229.
- 10) 高清祐加,河合祥雄(2010)順天堂大学スポーツ健康科学部生の飲酒意識調査(1)飲酒状況と飲酒の強要,順天堂スポーツ健康科学研究 2(3)(通巻57号), 99-105.
- 11) 高清祐加,河合祥雄(2010)順天堂大学スポーツ健康科学部生の飲酒意識調査(2)アルコールへの意識,アルコールと運動,飲酒教育のあり方 順天堂スポーツ健康科学研究 2(3)(通巻57号), 106-112.
- 12) 東京消防庁2013年12月号広報テーマ
<http://www.tfd.metro.tokyo.jp/camp/2013/201312/camp2.html>
- 13) Wadler GI, Hainline B, 監訳西勝英(1994)スポーツと薬物 Drugs and the Athlete, アルコール医薬ジャーナル社:136-145.

(平成26年6月23日 受付)
(平成26年9月26日 受理)